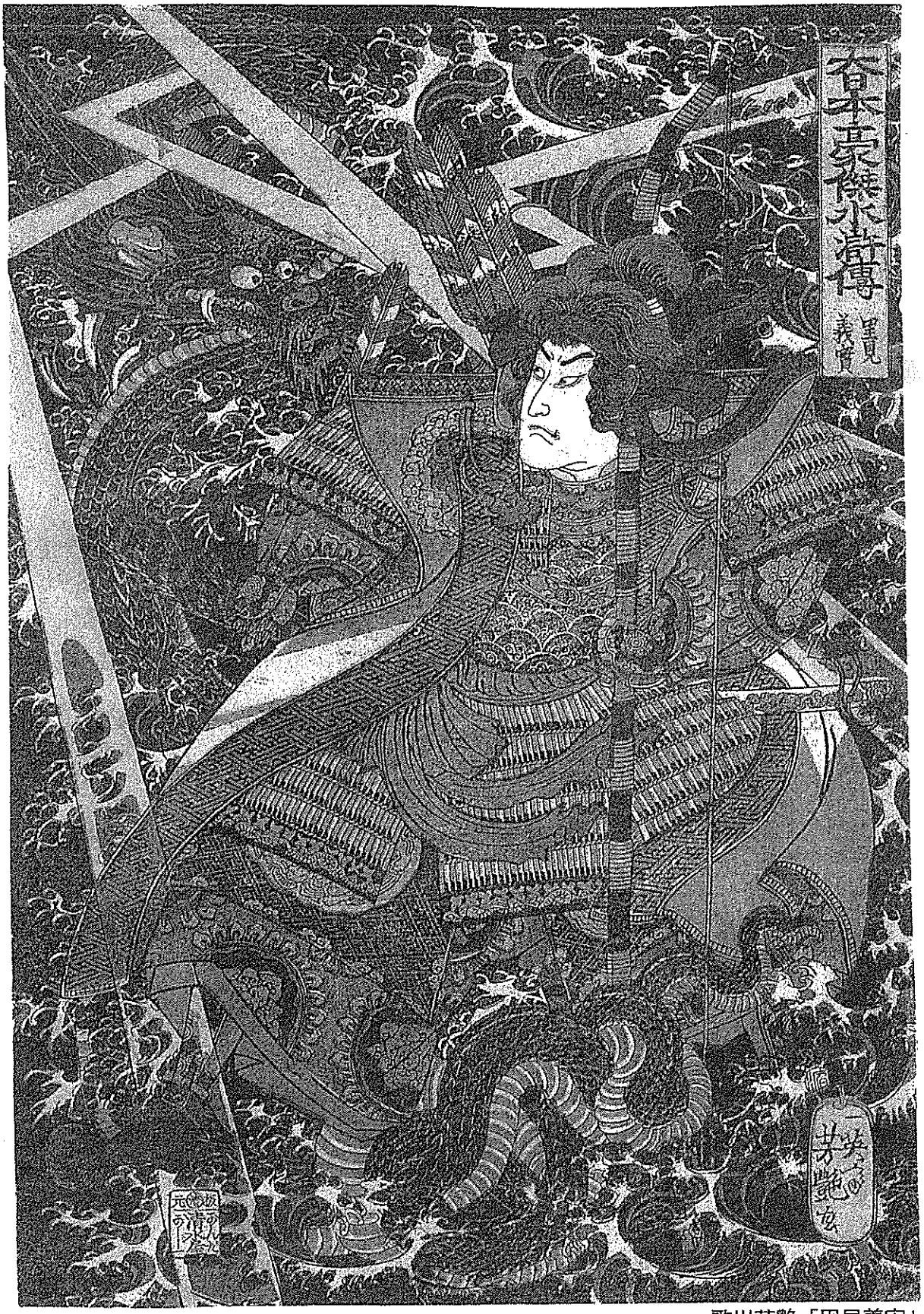
蔦重・馬琴・写楽・越谷新聞

令和7年5月10日・第５号・八犬伝特集号・旧日光街道・越ケ谷宿を考える会・発行



歌川芳艶「里見義実」

☆「映画　八犬伝」　越谷市民のみなさまに、ぜひ、ご覧いただきたい映画

○なぜ？越谷と関係ある曲亭馬琴のことを「実」として、馬琴の作り出した八犬伝を「虚」として作り上げられた「馬琴と八犬伝」を同時に楽しめる映画ですから～

○そして、越谷の南荻島の生まれの馬琴の奥さん「お百さん」とお目にかかれる映画ですから～

○越谷を愛する市民のみなさまに、ぜひご覧いただきたい映画なのです。

☆ 馬琴って、どんなヒトだったのか？

1767　明和　4　旗本松平信成用人・滝沢興義の五男として生まれる

1790　寛政　2　山東京伝に入門

1791　寛政　3　京伝門人・大栄山人名義で処女作「尽用而二分狂言」刊

1792　寛政　4　京伝を仲介として耕書堂・蔦屋重三郎の番頭となる

1793　寛政　5　馬琴・お百と結婚

1797　寛政　9　長男・鎮五郎（宗伯）生まれる　蔦屋重三郎没

1801　享和　1　黄表紙「曲亭一風京伝張」刊

1807　文化　4　読本「椿説弓張月」刊　～1811

1814　文化　9　読本「南総里見八犬伝」刊　～1842

1835　天保　6　長男・宗伯没　　1839　馬琴失明

1840　天保 11　お路口述筆記始まる　1841　お百没

1842　天保 13　「南総里見八犬伝」最終版刊

1848　嘉永　1　馬琴没

曲亭馬琴

○武士だといっても、旗本(はたもと)の用人というのは、旗本という武士の身分になんとかブラさがっている「使用人」であって、威張れるものではありません。馬琴が仕事についたのが、その旗本のお坊ちゃんのお守り役で、彼の気まぐれに悩まされ、14歳で「木枯らしに思ひ立ちけり神の旅」という一句を障子に書き付けて立ち去ったのです。(辞表に、俳句を書いて去るなんて、さすが、8歳で句を詠んだという文才の持ち主！)

○お百さん。そんなに癇性(かんしょう)だったのでしょうか。癇性というのは、「感情がはげしく怒りやすい気質」とありますが、お百さんは馬琴より五つも年上の引け目もあっただろうし、身分も町人と武士、教養も違う。「癇」を立てられたかなぁ？と疑問も残ります。

○馬琴さん。武士身分の端くれではあったけれど、息子のために「侍」身分を買うために奔走していたことを考えると、お百さんとの結婚でできた荻島在住の方々との親戚関係には、非常に冷たかったのではなかったかとの想像が先にたつのですが、現実はそうでもなかったようです。荻島の親戚が亡くなった際は駆けつけて、何日もその田舎家に滞留して葬儀の手伝いをしたようですし、やさしい面もいっぱいあったようです。

○馬琴さんというと、せっかちな怒りんぼう。その対極ですぐに思い浮かばれるのが浮世絵の葛飾北斎(かつしかほくさい)です。しかし、馬琴の作品に一番多くの挿絵(さしえ)を描いたのが北斎であるといわれています。竜虎、お互いに相手の天分に敬意を払っていたのか？　こいつはウルサイから、怒らせないようにしなくっちゃ.！と敬遠したのか。

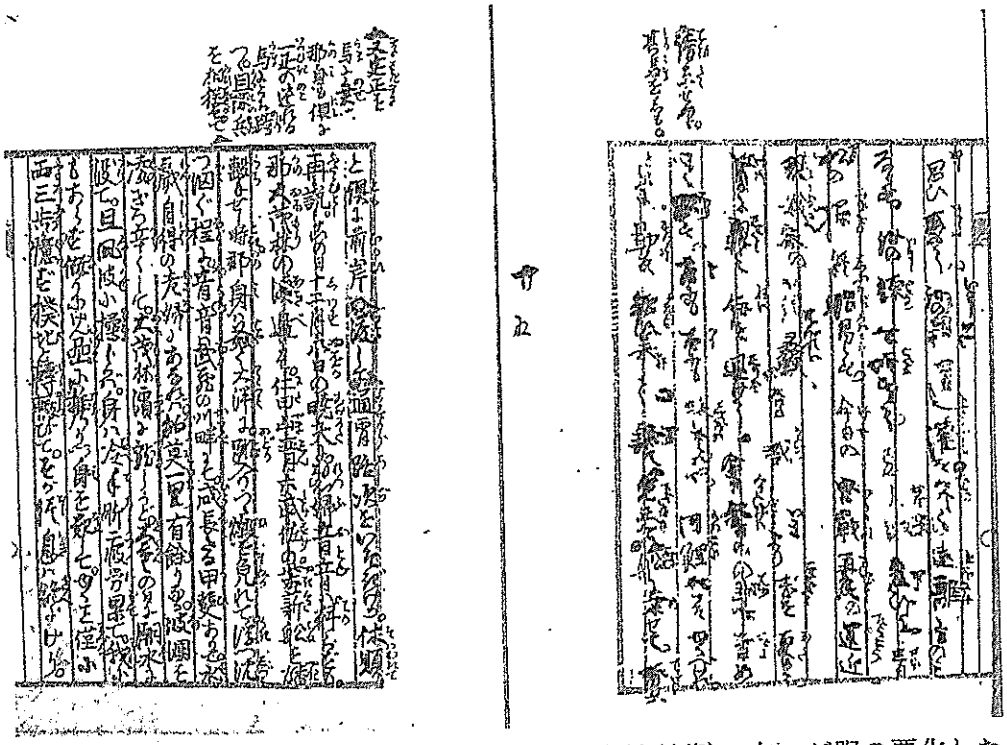
文化3年(1806)の春から夏にかけての3～4か月、二人が馬琴の住まいに同居し、仕事に励んだといわれています。

○馬琴の祖父の滝沢興吉(おきえ)は北埼玉郡川口村(現・加須(かぞ)市)の邑長(むらおさ)・御鳥見役(おとりみやく)の真中(まなか)治介の次男から滝沢家に養子に入っているようです。馬琴の身体を流れているのは埼玉

人の濃い血だといってもいいのかも知れません。

○馬琴の性格は「非常に几帳面」。日々のスケジュールは朝 6 時から 8 時の間に起床。洗面して、仏壇に手を合わせ、縁側で徳川斉昭（なりあき）考案の体操、朝食、茶を一服、書斎で前日の日記を書いて、執筆へ。まず、筆耕者（作家、著述家）から上がってきた前日の原稿のチェック。一字でも気になるものがあると辞書で確認。出版社からの校正も何回も行って、執筆よりも校正に手がかかる日々だったようです。

○馬琴の目の病い。68 歳で右目を失明、73 歳で両目失明となりました。大作・八犬伝の執筆中です。人気作とて、途中で筆を折ることもできず、最初は出版先の人たちの援助を依頼したが、歴史小説とあって、用語が難しく、みんな手をあげてしまう。長男が生きておれば、多少、創作も好きだったようで何とかなったのでしょうが、先に亡くなっている。頼みこんだのは、長男の嫁の「お路」。実家は医者だったのですが、歴史なんて知りもしない。始めは、馬琴もあきれる程でしたが、頼めるヒトは他にいないから仕方がない。無理無理お願いして、お路も 3 年間、口述筆記に山のような苦労を「して天保 12 年 8 月執筆完成。ようやく翌年（1842）正月に刊行されました。



『南総里見八犬伝』第九輯（早稲田大学総合図書館所蔵）。右 が眼の悪化した馬琴の草稿、左 がお路の代筆草稿。

馬琴が執筆を始めてから、28年、98巻・106冊が完成したのです。

馬琴がこの世界に入った折の恩人の蔦重が亡くなったのは寛政9年（1797）。

蔦重、この完成を知ったら、俺の目は間違っていなかったと威張ったことでしょう。

○曲亭馬琴か滝沢馬琴か

滝沢馬琴というのは、「滝沢」は姓、「馬琴」はペンネームですから、これをつなぐのはいけないのです。「曲亭馬琴（きょくていばきん）」とは「曲亭馬琴（くるわでまこと）」と読み、「遊郭（ゆうかく）でまじめに遊女（ゆうじょ）につくす（野暮（やぼ）な）男」という意味だそうです。元木網（もとのもくあみ）、鹿津部真顔（しかつべのまがお）、酒上不埒（さけのうえのふらち）、筆綾丸（ふであやまる）、加保茶元成（かぼちゃのもとなり）、尻焼猿人（しりやきさるんど）などの狂歌作者が出たころです。

馬琴自筆の挿絵原案

絵師・柳川重信の絵

上は国立国会図書館蔵馬琴自筆稿本『南総里見八犬伝』第九輯に見える口絵。下は出版された八犬伝の口絵。

○馬琴の八犬伝執筆動機＝水滸伝に匹敵するスケールの長編小説　　徳田　武・説

○馬琴と越谷を結ぶ「縁」として、俳句の師が越谷出身の越谷吾山だったことがあります。馬琴の兄の羅文が先に弟子入りしていた吾山に弟・馬琴も入門したのです。吾山は俳句のほか、日本で初めての方言辞典を編集し、日本での方言学の始祖としてでも有名です。

越谷吾山

南総里見八犬伝の中身を短くいうと―

グーグルその他のお助けを借りると、次のようになります。

①伏姫という里見家の聖女が、八人のヒーローの「魂」を生む

仁・思いやり　義・正義　礼・儀礼や作法　智・知恵　忠・主君に真心

信・信じる　孝・親に孝行　悌・兄弟や年長者への愛　<儒教の八つの徳>

②「魂」は「玉」の形で各地に散らばり、改めて人間の子供として生まれる

③子供たちは育って自分の使命を知り、里見家へ集結する

④八人そろった勇士たちが、団結して里見家の危機を救う

⑤関東に平和が戻り、八犬士は最終的に仙人となった

参　考

○歌川芳艶「里見義実」　芳艶（よしつや）は歌川国芳の門人

八犬伝錦絵大全　服部　仁著　芸艸堂刊　2017　から　表紙

○浮世絵師の絵で読む八犬伝　徳田　武著　勉誠出版刊　2017.6　P③、P④

○南総里見八犬伝名場面集　湯浅佳子著　三弥井書店刊　H19

○馬琴綺伝　小谷野　敦著　河出書房新社刊　2014.3